

〈書評〉

チャールズ・ディケンズ著 唐戸信嘉訳
『オリバー・ツイスト』
(光文社古典新訳文庫、2020年)

熊谷めぐみ

本書は、唐戸信嘉によるチャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) 作、『オリバー・ツイスト』 (*Oliver Twist*, 1837-39) の新訳である。孤児オリバーの数奇な運命を描いた本作は、ディケンズの小説の中でも人気があり、翻訳されることの多い作品である。本書はその最新版といえるが、新訳として読みやすいだけでなく、作品の持つシリアスなリアリズムを重視し、スピード感のあるディケンズの文体の再現を試みたという、意欲的な一冊となっている。

訳者のこだわりは挿絵の選択にも見られる。本書では、翻訳で採用されることの多い、連載当時の雑誌に掲載されていたクルックシャンクの有名な挿絵ではなく、同時代のアイルランド人画家ジェームズ・マホニーの挿絵が採用されている。訳者はその理由として、漫画的でユーモラスな挿絵が作品のシリアスな面にあまり合わないように思われること、ディケンズがクルックシャンクの作品への干渉をわずらわしく思い、それ以降は組んで仕事をしなかったため、別の画家による挿絵でもよかったと考えていたのではないかと想像されること、の二点を挙げているが (861-62)、この試みによって、本書は、作品の新たな面を打ち出すことに成功しているといえるだろう。

『オリバー・ツイスト』は、1834年に施行された新救貧法を背景とした救貧院の惨状や貧しい人々の現実を描いているが、同時に、ロンドンの最下層の犯

罪者たちの姿を描いた作品でもあった。本書にも収録されている第三版の序文において、ディケンズは、それまでの小説で書かれているような勇敢で美化された英雄としての犯罪者ではなく、ロンドンの最下層に生きる犯罪者の真の姿を写實的に描こうと試みた、と述べている。フェイギンやサイクスといったキャラクターは、確かに、読者に憧れの気持ちを抱かせるような人物ではない。しかし、ディケンズが、ナンシー殺害の罪を犯し、幻覚に悩み心理的に追い詰められていくサイクスの様子を、「殺人を犯しても裁きを逃れる連中がいる。神も仏もあったものではない。そのようにいう人々がいる。しかしそれは間違いだ。恐怖に満ちた、長い長い一分間の苦しみは、殺された側が味わった苦しみの数百倍に相当した」(728)と示して見せるとき、私たちは、粗暴で忌むべき凶悪な犯罪者サイクスにも人間らしい恐れや弱さがあることを、そして、彼もまた感情を持った一人の人間にすぎないということを知る。ディケンズはフェイギンやサイクスにわかりやすい共感や同情を示してこそいないが、彼らの心理を深く抉り出すことによって、美化された悪役には表現することのできないような、生々しい人間性と圧倒的な存在感を彼らに付与することに成功している。

しかし、ディケンズがいかに犯罪者の心理を巧みに描いていたとしても、『オリバー・ツイスト』を牽引する力を持つのは何といても主役のオリバーだろう。個性豊かな脇役たちの中で、オリバーは一見、ひどく無個性でおとなしい主人公にも見える。特にオリバーの持つ受動性が、彼自身の印象を薄めてしまっているように感じるかもしれない。しかし、この受動性こそ、オリバーの持つ重要な要素である。オリバーが受動的なのは、救貧院で生まれたその時から彼の人生が困難の連続だからであって、自分の力ではどうしようもない力に従わざるを得ないからである。無力なオリバーは救貧院から養育院へ、再び救貧院へと厄介払いするように送られ、その後も彼を利用しようとする人々によって、まるで道具のようにたらい回しにされていく。葬儀屋に徒弟に出されることを告げても感情を見せないオリバーの様子を見て、教区委員たちはオリバーのことを感情が欠けた鉄面皮の小悪党だとののしる。しかし語り手は、「実際、彼は感情にとぼしいのではなく、ありすぎるのだった。しかし、虐待を受けつづけた結果、だんだんと愚鈍で無愛想になってしまったのだ」(58)と、オリバーの心理に鋭く迫り、彼に寄り添う。オリバーが終始受け身なのは、彼がそうせざるをえないからである。「彼は苦難に慣れっこだったし、現在の生活も苦難に次ぐ苦難といってよかった。だから今更、生活環境が変わることにそれほど

悲しんだりもしなかった」(291)として描かれるオリバーは、生き延びるために諦めを身につけなければならなかった悲しく幼い弱者である。だからこそ、そんなオリバーが、自らの力で行動を起こしたり、感情のままに思いを伝える姿を見て、私たちは感情を揺さぶられずにはいられない。困難を乗り越えようと勇気を出す時、ノア・クレイポールの激しいじめに反撃する時、どんなに運命がオリバーを翻弄しても、それによって何も変わらないとしても、それでも強く生きようともがくオリバーの意思を垣間見る時、その健気さと力強い命の輝きに胸を打たれる。ひもじさに耐え兼ねた子どもを代表して、わずかな粥のおかわりを求めるオリバーは無力な子どもにすぎない。しかし、だからこそ、オリバーが生きるために見せるその小さな一歩が、どんなに絶望的な環境でも希望を失わないその純粋さが、読む人の心に残り続けるのだろう。

『オリバー・ツイスト』は構成の矛盾や欠点がたびたび指摘される作品である。しかし、訳者が、本作が「くり返し映画化され、ミュージカル化され、時代を超えて世界中の人々に愛されている。このことは、この物語が欠点を補ってあまりある魅力を備えている事実を如実に示している」(851)と指摘するように、いかに矛盾や欠点を孕んでいても、『オリバー・ツイスト』を読む限り、そのことが物語自体の持つ面白さを損なうことは少しもないように思われる。物語の面白さを詰め込んだ『オリバー・ツイスト』という作品が、本書によって、ますます多くの人に読まれる機会を得ることを嬉しく思う。